

トナカイ遊牧民トゥバ族のスキーと狩猟

松 下 唯 夫

はじめに

スキーは、狩猟や採集・移動の手段として使われていたスキー（古代スキー）と、スカンジナビア半島で古代スキーから発展したスポーツとしてのスキー（近代スキー）に分けられる。

近代スキーの始まりについて、ノルウェー・オスロ郊外、ホルメンコーレンの丘にあるスキー博物館の館長であった故ヤコブ・ボーグ氏¹⁾によれば、960年ノルウェーの詩人グットルム・シンドレは「スキーは高貴な生まれの戦士の教育にふさわしいスポーツだ」と述べ、王も首領もスキーを練習したことを書き記している。氏はこの記述を近代スキーの始まりを示す最も古いものとしている。これが正しいとするならば、近代スキーの歴史は約1千年となる。

我が国にスポーツとしての近代スキーは、20世紀はじめに外国人によって伝えられたが、それ以前に、雪国の子どもたちには「すべり遊び」の道具があり、その歴史は、かなり古いと考えるが、その考古学的な証拠となるものは、まだ見つかっていない。

菅江真澄(1754~1829年)は、紀行文の中に「立ちソリ」²⁾すなわちスキーをスケッチしている。その横に「子どもは、これに乗って雪の斜面を滑る」と書かれている。1784年秋田で書かれたこのスケッチが筆者の知る限り、日本の記述として最も古いものである。この様な「雪すべり」が各地で盛んに行われたにもかかわらず、現代のスキーに発展することはなかった。日本では「遊びで始めて遊びで終わった」といえる。日本の古代スキーの痕跡は、まだ見つかって

1) Jakob Vaage「Skiesnes Verden」オスロ 1979,

2) 菅江真澄著、内田武志・宮本常一編訳「菅江真澄遊覧記」平凡社 1965,第1巻 P101

いないが、狩猟民であったことから、今後の考古学的発見に期待出来るかもしれない。

I 古代スキー史の概略

生活手段として使われていたスキー（古代スキー）の痕跡は、スキーをしている人物の岩石刻画³⁾や沼地で発掘された木のスキー⁴⁾によって紀元前2500年まで遡ることができる。しかし、古代スキーはもっと古く、雪国に住む人類の歴史とともにあったと思われる。なぜなら、雪深いところや湿地帯で狩猟をするためには、弓矢と同じくスキーが必要であったと考えられるからである⁵⁾。古代のスキーが発見されたおおまかな分布は、スカンジナビア半島からユーラシア大陸を通り、アメリカ・アラスカ州までの亜北極帯である。その南限は、緯度ではなく温度と降水量に関係する七度の等温線である。この等温線が十分な積雪量を示す。七度の等温線は、南スカンジナビア（オスロあたり）から北アジアを南方に下りながら東に走り、朝鮮半島（北緯約四〇度あたり）に出る。この地域の先達者の研究報告は、スキーの型・材質・使用の目的・使っていた民族名などの記述が主で、スキーと狩猟法・作り方・操作・狩猟と経済などについて、詳しく踏み込んだものはなかった。また、ほとんどの文献は現在使われていないと報告し、現在も使っている民族があると記述したものは少ない。

中野理⁶⁾は、ヘロドトス⁷⁾が書いた「歴史」の中に、アルタイ地方に住む民族が山羊足で雪中を走ったという記述があり、これをスキーに関する最古の文献であるととしている。また、中野は中国の神話・伝説 [山海経] 中の釘霊之国の

3) Gutorm Gjessing「北の山々の絵」オスロ 1936、北西ロシアOnegas湖・Zalavrouga湖の岩石刻画

Jakob Vaage「Skiesnes Verden」オスロ 1979、

4) スエーデン、ソビエト・プスコフ(モスクワ北西880キロ)で出土した木のスキーなど

5) 松下唯夫「日本と諸外国の文化的交流」大阪外国語大学 1985・1986、北ユーラシアのスキーと日本

6) 中野 理「スキーの黎明」四季社 1957、P17～18

7) ヘロドトスの記事は、スキタイの商人・ギリシアの商人からの伝聞にもとづいたと考えられている。その商人のルートは毛皮街道といわれ、北道・南道ともにアルタイ地方まで届いていると推測されている(加藤・前島 共編 シルクロード事典 芙蓉書房 1975)

ところ「その民、膝より以下毛あり、馬蹄にして、よく走る」をスキーであると解釈している。しかし、いずれもこれがスキーを言い表したものと断定するのは難しい。雪靴・カンジキのことをいっているのかもしれない。

「中国大百科全書」⁸⁾ 体育編のスキーの項には、次のように記載されている。北史の第九四巻に中国の北方についての記述がある「気候は最も寒く雪が深くて埋もれてしまう、地面には積雪が多く、穴やくぼみに落ちるのを恐れ、木に騎って行く」とあり、中国では、この北史の中に書かれているものが最も古いものとしているようである。しかし、これも「木に騎って行く」と書かれているように、また、言語が未分化の時代を考えると、カンジキもしくは襦かもしれない。古代スキーについての記述は、唐の時代（7世紀～10世紀）から14世紀までの古文書に多く出てくるが、いずれも短文でスキーのことを詳しく伝えるものはなかったが、アブ・ハミドの旅行記「心の贈り物」⁹⁾には、商人とクロテンの毛皮の取引、スキーの長さ、幅、型、締具の位置、締具の種類と方法、ストックの型・材質、スキーとストックの操作法が詳しく記述されている。これは、1162年モスール（Mosul・イラク）で書かれ、左横の余白にスキーのスケッチもある。この旅行記は、信憑性が高く、古代スキーの様子を詳しく伝えるものとして、筆者の知るかぎり最古のものである。

また、フィンランドの叙事詩カレワラに登場するスキーの英雄レンミンカイネンは、シベリアタイガに住む狩人がモデルになっている。このことから、スキーの原点は、シベリアのタイガ地帯にあると推測できる。この生活手段として活躍したスキーが、長い歴史を経て、約1千年前ノルウェーにおいて、スポーツへ、また800年前、戦争の道具として使われ始め、スキーが広まっていった。¹⁰⁾

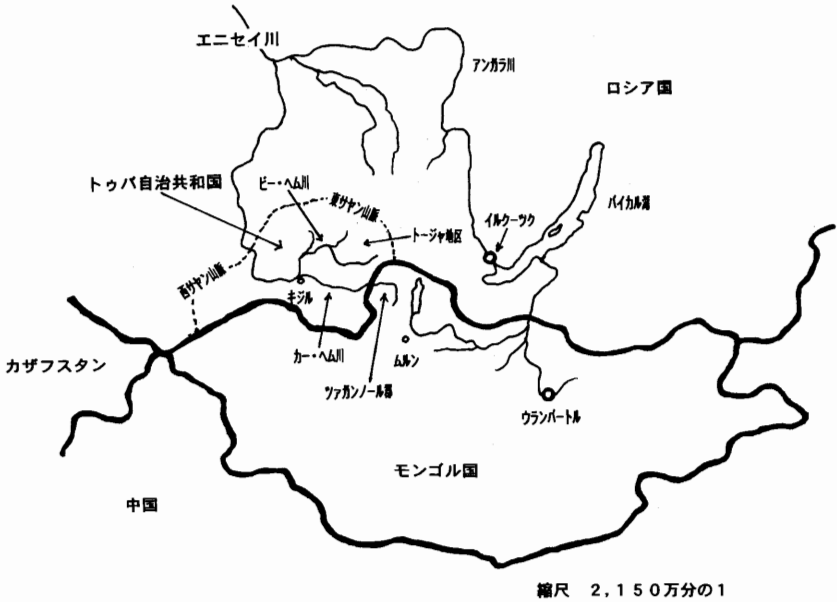
8) 「中国大百科全書・体育編」中国大百科全書出版社 1982,

9) ABU・HAMID'S(1080～1170)は、二度自分の旅行について書いた。1120年バクダードで「西方より不思議なことのアンソロジー」と1162年モスール(イラク)で「心の贈り物」を書いた。心の贈り物のなかの、ユーラシアを扱った原典の一部にスキーのことが記されていた Cesar Dubler, Madrid 1953; ARABER VIKINGAR VARINGAR, Stig Wikander 1978, P83

松下唯夫「アブ・ハミド旅行記にみるスキーの信憑性について」日本体育学会 第38回大会号 1987, P72

10) Jakob Vaage「Skienes Verden」OSLO 1979, P11

トウバ関係地図



II 先行調査と調査地域

今日まで古代スキーの原型をとどめている「毛皮スキー」について、シベリア・モンゴルの文献を調べてみた。スキーを使っている民族が、生活をしていくために、どのような関わりをもっているのか、詳細な報告は見当らなかった。また、最近の文献には、スキーは雪上スクーター（スノーモービル）に変わり、現在あまり使われていないとあった。スキーの文献は、多くはロシア人の研究者のもので、ツンドラや森林に住む、エヴェンキ、ナナイ、ハンテイ、マンシ、コリヤークなど、ほとんどの少数民族を対象にしている。しかし、東サヤン山脈の南側、エニセイ川源流に住むロシアのトゥバ民族とモンゴル国に住むトゥバ（ツァータンと呼ぶ）の毛皮スキーについて、詳しく調査がなされていない事がわかった。

トゥバ族は、現在のロシア連邦・トゥバ自治共和国とモンゴル国にわかれてトナカイ遊牧と狩猟で暮している。もともとトゥバの人たちは、トナカイとともに季節によって自由に移動していたが、モンゴル人民共和国が成立（1924年）後、国境線を引かれてしまい移動が出来なくなってしまった。国境線が引かれたとき、どちらの国に所属するか選択肢が与えられ、1994年現在モンゴル北西部に29家族160人が暮している。

モンゴルの民族学者S・バダムハタン(С. БАДАМХАТАН)は、1959年と1960年に、モンゴル北西部ツァガンノール郡の山岳地帯をフィールド調査し、その報告書がある。¹¹⁾

氏の報告によれば、スキー（ЦАНА，トゥワ族はハーク ХААГという）は冬に使う。これは、ラシド・アド・ディンの書いた13～14世紀のチャネ(ЧАНЭ)と同じもので、長さ160～180cm、幅15～16cmの白樺の木を切り、平らにして先の方を曲げる。底（滑走面）に馬または、カモシカの皮を張り、毛足のあたる面を外に出し、真ん中に「心臓」と呼ばれる違った色の皮を縫い付ける。前へ進みやすく、後へ滑らないようにするため、毛並みを後方に向けて作る。冬期、狩りをするためにスキーを使っていたと老人たちは話していた。また、今、スキーをあまり使わないから、スキーをつけて行くことが出来る人はいなくなっている。ウラーンウール郡のサンダク（САНДАГ）エレクゼド(ЭРЭГЭД)たちにスキーがあるけれども彼らはあまり使わないと語っている。とスキーのことについて、数行だけ記述している。¹²⁾

またその後、この地を調査したキャロライン・ハンフリーの報告もある。¹³⁾ キャロラインは、バダムハタンのように、奥地の森林に住み、トナカイ遊牧と狩猟で暮すトゥバ族のフィールド調査はしていない。また、スキーの記述はなく、モンゴル政府の定住化政策で出来たゴルバンサイハン(ГУРВАНСАЙХАН)村

11) С. адамхатан「ХОВСГЛИЙ ЦААТАН АРДЫН АЖ БАЙДЛЫН ТОЙМ」Улаан баатар

12) 同上，P34

13) キャロライン・ハンフリー「世界の民族・第14巻，シベリア・モンゴル」平凡社 1979，P74～74

で聞き取り調査しただけである。バダムハタンが記述しているように、もうスキーは使われていないのであろうか。筆者は、モンゴルの都市部からトゥバ族の居住地へ行くには、アクセスが非常に悪いこと。山深いタイガの森で遊牧する特殊性から、ロシアやモンゴルの近代文明の影響をあまり受けていないのではないかと考えていた。

1989年夏の予備調査で、その人たちは数千年前とあまり変わらない暮らしを続けているという情報と、トゥバの毛皮スキー（片方）が、ウランバートル市のスポーツ宮殿にあった^{図1}そのスキーは、前方の反り上がった部分が高く、雪深いところで使っていたことを示していた。文明の影響を受けない間に急いで調査をする必要があった。

また、調査の報告がない同じトナカイ遊牧民のロシア・トゥバについても、急いで調査をする必要があった。

Ⅲ 調査の概略

1991年夏から、モンゴル国北西部フブスグル県ツァガンノール郡(ЦАГААН ХҮҮР СУМ)に住むトゥバ族を調査した。ここは、ロシアの国境に近く、エニセイ川（モンゴル名シシクド川）の最上流部で三千メートル級の山々に囲まれたタイガ地帯である。山深い森でトナカイ遊牧と狩猟で暮しているトゥバ族の居留地までのアクセスは、フブスグル県の中心都市ムルン市から、ゴルバンサイハン村まで約260km、峠の一部を除いて道らしき道はなく、湿地や河川が多い。さらに、川には橋がほとんどなく、雨で増水したら2～3日は渡るのを待たなければならない。腰まで浸かる深い川でも渡ることが出来るジープ車が大型トラックが必要である。冬期は、川や沼地が凍るので容易に行けるが、気温がマイナス35度から40度まで下がるので難しい。ゴルバンサイハン村から奥地までは馬を使う。エニセイ川の北東部へは馬で3日。南西部へは馬で2日かかる。いずれも、夏営地は標高2千～2500メートルの高原湿地帯にある。この地域の調査はモンゴル人の民族学者バダムハタンが入村しただけで、外国人には33年間、立ち入りを許可しなかった。幸いにモンゴル政府機関、モンゴル・

オリンピック委員会、スキー連盟の援助で調査が実現した。

ロシア側の調査地は、イルクーツクから週1便の飛行機に乗り、首都のキジール（Кызыл）まで行き、そこから、トージャの中心地トーラ・ヘム（Тоора-Хем）までエニセイ川源流に向かって高速カッター船で10時間、冬は川が凍るのでヘリコプターで1時間、それ以外の交通手段はない。東サヤン山脈の南側のトージャ地域の人口はおよそ6千人、その内の3分の1がトーラ・ヘムに住んでいる。残りの人びとの内約30家族がトナカイ遊牧民である。2つの交通手段、自動車とトラクターに乗り、最初の宿营地アザス湖（Азас）に着く。そこからトナカイ遊牧民の夏营地まで、馬に乗り約250キロメートル、片道7日間の道程である。タイガの森は、苔に隠された大きな穴、馬の腹まで入る湿地・泥沼、倒木、蚊、ブユ、突然現われる深い川と雨など、容易に人を通してくれない。森を過ぎると高原湿地帯に入り、その上は、寒冷的な、そしてトナカイ・パニックになる恐れのない虫（蚊・ブユ）のいない、雪が積もっている一歩手前の高い山々に、トナカイ遊牧民の夏营地がある。そこはウデゲンといい、バラン（Баран）一家が住んでいる。

[モンゴル側調査]

調査は、1989年夏に予備調査をし、1991年から1998年冬まで（95年は除く）7回行った。1回の調査には平均25日間を要した。1991年には、文部省「海外学術調査費」を受けた。

[ロシア側調査]

調査は、1993年夏から1995年夏、1996年冬に合計3回行った。1回の調査には平均35日間を要した。

IV トナカイ遊牧民トゥバ族の暮し

モンゴル・トゥバ族のことをツァータンという。周辺のダルハト、ハルハ族などの人たちが、彼らのことをツァーブガ（ЦААБУГА・トナカイ）を飼養する人たち、また「トナカイの肉を食べる人たち」という意味でツァータンと呼んでいる。この名称は、蔑視用語でツァータンの人たちは不快感を示す。モ

ングルのトナカイ遊牧民トゥバ族の人口は、1994年現在約800人、内454人は村に住み、160人は森の中でトナカイ遊牧と狩猟で暮している。残りの人たちは他の郡部に住んでいる。160人の内、12家族50人はエニセイ川の北東部に住み、17家族110人は南西部に住んでいる。

調査のガイドをしてくれたムンフバット（НАЦАГ МОНХБАТ 1932年生れ）は、私たちは、ウイグル語を話すウイグル系のトゥバ族である。トゥバ族という呼び名は総称で、オラト（УРАТ）バルクシ（БАЛГШ）サヤン（САЯН）ドウドウド（ДОДОД）ヘムシク（ХЭМШИГ）ダルガラール（ДАРГАЛААР）など、ウイグル系の人たちのことをいう、と説明してくれた。

エニセイ川上流（モンゴルではシシクド川）の北東部に住む人のことを、トゥバの人たちは「東の森のウイグル人たち」と呼んでいる。同様に南西部の人たちを「西の森のウイグル人たち」呼ぶ。1994年現在、トナカイは総数約1200頭飼育されている。彼らは、1家族に40頭のトナカイがいれば生活が出来るという。

ロシア・トゥバ自治共和国、トージャ地区のトゥバ族の人口は、約6000人、その約3分の1が中心地トーラ・ヘム（Тоора-Хем）に住んでいる。残りの人びとのうちの約30所帯がトナカイ遊牧をしているらしい。正確なことは、役所でもつかんでいない。トナカイ遊牧民の主な氏族は、バラン（Баран）アク（Ак）コル（Кол）で結婚するとき夫が姓を変えることもある。我々が訪れたビクトル・バラン（Баран Виктор）がその例である。

トナカイ遊牧と狩猟で暮しているロシア側とモンゴル側の人たちは、ほとんど生活様式に差異は見られない。もともと国境線を引かれるまで一緒に暮らしていて、遠い親戚縁者が両国に居るという。しかし、モンゴル側は伝統的な円錐形住居に住んでいるが、ロシア側は、トゥバの大統領から贈られたテントで暮らしている^{写真1}。しかし、時が経ってテントが使い古されてしまった時、再び円錐形住居に戻ると思われる。

トゥバの人たちの住居は、森の生活に合った円錐形住居ウルツ（УРЦ, АЛАЗУ ОГ）というものである^{写真2}。ウルツは、丸太の木（だいたいカラマツの生

木、長さ5～6メートル)を使う。小さいウルツは、丸太19本～21本を円錐形(底辺の直径約6m)に組み合わる。大きいウルツには28本～32本を使う。最初に、先が二股になった中心の木(ゴルの木)を用意し、これをウルツの西北の位置に立て、他の木を左と右へと丸く置きながらゴルの木に寄り掛かせる。また、二股の木のかわりに3本の木の先をくくり、それに他の木を寄り掛かせる方法もある。円錐形に組み合わされた木に、昔はシベリア松(ГАИГУР)の樹皮を剥ぎ取り、それを小さく四角に切ったものを張りつけていたが、19世紀頃ロシア人とブリヤート人から、布を買い初めてから布を使うようになった。布は、巾1m20cmで長さの合計が40mぐらいのものを使う。布を巻いた後、風で飛ばされないように7～8本の木で押さえる。冬季マイナス40度になっても、薄い布の中で暮す。また、寝る前にストーブの火は消され、地面に敷かれた毛皮の中に潜るようにして眠る。ウルツの入り口は南にあり、入って左側にはトナカイの鞍、皮紐、服・靴など、狩りの時に使う道具を入れた袋、鉄砲がある。正面に神棚、時計回りを見ると、その並びには子どもたちの袋(服・靴など)子ども用の鞍、丸太をくりぬいた揺りかご(吊り下げている)女性が使う道具、女性の服・靴、食料袋、お茶の入れ物、炊事用具(やかん・杓子・水入れ・小臼など)がある。ほとんどの物は、丸太とブレスの間に挟んで吊してあった。中央には、ストーブまたは五徳(燃料は木)がある。お客様が座る位置、主人の場所、子ども、女性が座る所は決められている。冬に使う狩猟の道具(毛皮スキー)は、狩場に置いてある。スキーは他人に見つからないような所の大きな木に、ぶら下げて置くだけである。

食事は、モンゴル、ロシアともに、肉・パン・乳製品・魚・お茶で、小麦粉・お茶・塩は自給することは出来ないのも毛皮・角・肉などと物々交換で手に入れる。

[移動と年間スケジュール]

ツンドラ地帯に住むトナカイ遊牧民は、草や苔、また、害虫の少ない寒冷地を求めて、時には1千キロ近く移動するが、それに比べて、モンゴル、ロシアのトゥバ族は、夏は標高の高い所に、冬は標高の低い森に移動する。移動の回

数は、その年の気候によって違うが、だいたい6回から10回移動する。移動する距離・範囲は、国境線を引かれた関係もあって、モンゴルは半径約50キロ、1回の移動距離は20キロぐらいである。ロシア（トージヤの人たち）は、半径約150キロ、1回の移動距離は、家畜の頭数にもよるが20～30キロぐらいである。モンゴルでは、他人に家畜の世話を依頼することはないが、ロシアでは、寒さの厳しい冬季は、村から100キロぐらいの所に移動して来て、3家族のトナカイをまとめて1家族が飼育する。他の2家族は、村に行つて休養する。飼育は1ヵ月、休養は2ヵ月の交代制である。

9月～11月	はじめ	1オトナカイの去勢、トナカイの交尾
11月～2月	中旬	狩りをする（獲物の種類によっては1年を通して）
2月		特別な仕事はない
3月～4月		自然に落ちた角拾い
5月		トナカイの出産（5月15日～6月10日頃まで）
6月～7月		乳製品を作る、6月中旬～7月トナカイの角切り
8月		特別な仕事はない

* 搾乳 6月～7月、1日2～4回搾乳、1頭につき1回約200g
8月～9月、1日1～2回搾乳、1頭につき1回約100g

V トゥバ族の狩猟と毛皮スキー

狩りによく出かける人は、飼養トナカイが少ない森の人と、村に住む狩り専門の人たちである。その人たちは、1年中狩りをして、生計を立てている。主な獣は、クロテン・マヌルネコ・クマ・リス・シカ・カワウソ・ヘラジカ・トナカイ・イノシシ・ノロジカ・川魚である。ビーバーは現在保護されている。

村に住むモンゴル・トゥバ、サンジーン・ソドフ（C・СОДОВ 1939年生れ）の狩場は、ゴルバンサイハン村の西北150kmのジャムツ山にある。そこには、冬になって川と土が凍らないと行くことが出来ない。毎年10月20日に犬とトナカイを連れて出かける。狩は2ヵ月間続け、村には12月に帰って来る。村に10日ほど滞在し、狩の準備が出来たら、2回目の狩りに出発し、3月のはじめま

で戻らない。1日の平均気温マイナス30～40度の中で狩猟をしている。眠るのは小屋ではなくほとんど野外である。雪の上に、生木の枝を敷きつめ、その上で焚火をして食事する。食事が終わったら火を消し、その上に毛皮を敷き、毛皮を被って寝る。焚火の余熱があつて暖かいと話す。服装は、必ず綿入れの物を着る。毛皮の服は汗を吸い取ることが出来ず、汗が凍ってしまい命が危ない。食料の肉は、トナカイ3頭分を持って行く。2頭は自分の食用に、1頭は犬が食べる。銃は背中に担ぎ、歩いたり、スキーやトナカイに乗ったりして行く、毛皮のスキーは、雪の深いときに使うが「毛皮スキーは、音がしないので獲物に近づくことが出来る。毛皮スキーのない狩りは考えられない」とソドフはいう。毛皮スキーが現在も使われている、大きな理由であることを確認できた。

【主な狩猟獣と期間・値段】1994年現在「モンゴルの狩人ソドフ氏場合」

*モンゴルのサラリーマンの平均給料約12000トゥグルク（クロテン1匹の毛

（狩 猟 期 間） （毛皮一枚の値段）

▲クロテン（БУЛА）	10月20日～2月15日	1万～2万トゥグルク
オオヤマネコ（ЩИЛУУС）	々	々
アナグマ（НОХОЙ ЗЭЭХ）	々	1万～2万5千
リス（ХЭРЭМ）	々	100～150
シカ（БУГА）	9月～翌年4月	1万～2万5千
クマ（БААВГАЙ）	9月15日～10月20日	々
▲ヘラジカ（ХАНДГАЙ）	9月～翌年4月	々
トナカイ（ЦАА ГОРООС）	々	々
イノシシ（ГАХАЙ）	9月20日～11月20日	々
ノロジカ（БОР ГОРООС）	8月1日～3月1日	々
▲カワウソ（УСНЫ БУЛГА）	10月20日～2月末	2万～2万

皮で1ヵ月暮すことが出来る） ▲印の獣は現在猟を禁じられているが、奥地で官憲が入れないため、伝統の狩猟は密かに行われている。

【クロテンの狩猟】

この地方のクロテンの狩猟は、10月～12月まで罨猟、12月～2月15日まで銃を使う。クロテンの毛は10月20日～2月15日までが一番良い。それ以後は、交尾が始まり毛が痛むので良くない。罨猟は、ザンガ（ЗАНГА）という仕掛けで足を掴み、首を木で押さえ、右手で心臓を強く握って殺す、すぐに解体して毛皮と肉に分ける。クロテンがいる所は、岩が多いのでスキーは近くに置いて行き、待ち伏せて銃で打つ、もしくは罨を仕掛ける。牝のクロテンは捕らないことにしている。見分ける方法は、雪の上についた足跡を見る。雄は遠い所へ出かけ、歩幅が大きい。それに比べて牝は、自分の穴の近くしか動かない。また、歩幅は小さいのですぐ判る。クロテンは、1つの山に1匹住んでおり、12月20日から2月15日まで約2ヵ月間だけ穴で生活する。その他はブラブラしている。2月中頃、交尾するとすぐ別れてしまい、5月頃、2匹の子どもを生む。子どもは大きくなると母親の穴から出て行ってしまう。クロテンは1年に2回出産するので、大きな山ひとつにつき、捕るのを3匹以内にとすると、毎年一定の数が捕れる。クロテンは、警戒心の強い動物で、他の動物や人間に穴を見つけられないように、工夫して足跡を付ける。しかし、狩人には簡単に見つけられてしまう。また、人間が穴に近づくと、すぐに穴をかえて別な所へ行ってしまふ。クロテンの鳴き声は、犬が怒った時に出す声「ウー、ウー」に似ている。クロテンの餌は、果物（ЖИМС）木の実（САМАР）ネズミ・小さなウサギ等を食べる。サンジーン・ソドフのノートからクロテン捕獲数を年度別（1972年～1993年）に見ると、22年間で529匹捕獲、年平均24匹である。年度毎に見ても、毎年平均値に近い捕獲数である。氏がいう動物を絶やさない工夫を長年続けている結果である。現在、モンゴル政府は、ヘラジカ・クロテン・カワウソを禁止しているが、保護に自信をもっているソドフには届かない。

[毛皮スキー]

モンゴル・トゥバ族の人たちが、1年間に移動する範囲は直径50kmぐらいで、他国のトナカイ遊牧民に比べてエリアが狭いのが特徴的である。ここは、標高2千mから2千5百mの高原湿地帯で、積雪量も多く、冬期はマイナス30度から50度になる。高原湿地帯のまわりの山々は、2千8百mから3千m級で低い

灌木とガレキの山である。高原から少し下ると、タイガの森が広がる。ここに暮している人たちのスキーは、近くにある材料で、地形・積雪量・雪質・狩猟の方法に合わせて作られている。この様な狭いエリアで、ほとんどの人たちは、よく知り合った関係にあるのに、スキーの作り方はそれぞれ違っていた。

[スキー台] の作り方 (ソドフの場合) 木部の材料は、シベリア松 (ГАЛЛЫР) で、3月の終り頃の木は水分を多く含んでいて、柔らかく曲げやすいので切り、ノコギリで板状にカットする。スキーの前方部分 (トップ) を曲げる方法はスケッチ^{図2)}のように固定して、夏まで乾燥させる。その後、形を整え、秋に毛皮を張る。他に木杵を組んで曲げる方法、お湯に浸けて曲げる方法などがあり、近くに住んでいながら、それぞれ違っていた。また、後方も少し曲げる。これは、坂を登るとき、スキーが後方にずれて、雪の中に沈み込まない様にするためである。

[締め具] 足の固定の仕方は、4つの穴をあけ、皮紐で結ぶ^{図3)}。また、足を乗せる部分に皮を張り付けてあるのは、そこに雪が付かないようにするためである。いずれも、踵は上がり固定されていない。

[滑走面] 毛皮はオオジカ・ウマ・トナカイ等の足の脛の部分を使う。ロシアは、馬の毛皮が手に入らないのでトナカイの毛皮を使う。これを幾つか継ぎ足して滑走面全体に張る。毛並みは後方に向けて張る。これは、前に進みやすく、坂などで後へ滑らないようにするためである。また、物事にこだわる人は、右足の毛は右のスキーに張り付け、左足の毛は左のスキーに張り付ける。また、滑走面に三角形の部分^{図4)}があり、ズルフ (心臟 ЗУРХ) と呼ばれている。この部分の毛皮は、毛足の短い色の違ったものを使う。これは、現代のスキーの溝にあたり、真っすぐ進めるように工夫された物である。ズルフのない物^{図5)}もあった。

[ストック] ストック (杖) は1本で、川岸に沢山生えている白いブルガス (БУРГАС) を使う。この木は、軽くて丈夫である。また、握る部分 (グリップ) は、木の節や枝の部分を利用して、握りやすくしてあった。

[靴] スキーのために特別に作った靴でなくても、滑ることができるが、非常に寒い所なので彼らは、雄カモシカの毛皮を使って靴を作る。雄カモシカの毛

皮は、皮が厚く丈夫で、暖かい。皮紐も、雄カモシカの皮で作ることが多い。

【毛皮スキーと狩猟】 デンズェン・サンジ（ДЭНЗЭН САНЖ 1932年生れ）
の場合

スキーは、シベリア松(ГАЦУУР)の木で作り、オオジカの毛皮を張った。オオジカの毛皮が一番滑りやすく、長さは2 m、巾22cmのスキーを使う。大きい動物、オオジカやクマを捕るときは、2～3人チームを組んで狩りをする。1人で狩りをする時もあるが、事故の時は困るのでそうした。彼らの狩りは、トナカイに乗って行き、食料はソリに積みトナカイに引かせる。途中、トナカイを置いて、さらにスキーで遠くへ行って狩りをする。一度の狩りに10日から20日ぐらいかけ、片道100kmぐらい先まで行く。獲物は、雪が多いときは、オオジカ・イノシシ・クマ・クロテン・リス等を捕る。クマは、犬に穴を探させ、スキーで近づいて銃で打つ。狩りの時は、全て野営する。

一番楽しい狩りは、雪深い山麓や谷で休んでいるオオジカを捕る時である。オオジカに気づかれないように、風下または横風を受けながら、スキーで山を登り、山の頂上から滑り降りて、オオジカに近づき銃で仕留める。昔はナイフを使っていた。斜面を滑り降りる時、直滑降は両足（両スキー）を肩幅ほど広げて安定させる。獲物が左へ逃げたら、左足を少し前に出し、両膝を軽く曲げながら左へターンをする。右ターンはその逆をする。また、止まって銃を構える時、体を安定させるために、右手で引き金を引く人は、左のスキーを前方へ持ち上げ、右のスキーの上に重ねるようにクロスさせる。

獲物が捕れた次の日は、休みにして肉を食べ、皆でスキーを楽しむ。丘の上から誰が一番早く滑り降りるか。林の中、木の間を誰が一番上手に滑るか。ストック無しで誰が一番上手に滑るか競争した。狩りに行かない日も、近くの丘に登ってスキーを楽しみながら練習をした。練習は、丸くした木の玉を、上から転がして、後からそれを追いかけて銃で撃った。

ロシア・トゥバのスキーはトナカイの毛皮を使っているが、その他、長さ・幅などは、ほとんど同じである。馬の毛皮は、3～5年ぐらい保つが、トナカイの毛皮は1年しか保たないので、毎年張り替える。

VI まとめ

生活手段として使っていたスキーについて、1980年からフィールド調査している。はじめは「スキーは伝播・変容して世界に広まった」と考えていたが、最初の調査地ノルウェー、スエーデンの資料館・倉庫を見て、その考えが間違っていることに気づいた。特に、ストックホルムの博物館の倉庫には、おびただしい量の古代スキーがあった。バスケット・コートぐらいの広さの所に見易く、整理されており、それを2日間調べたが、類似した共通点は、締め具の四つ穴（皮紐を通す穴）だけで、他に見い出すことはできなかった。その後、ロシア連邦のエベンキ族・ブリヤート族、モンゴル、韓国などのスキーをフィールド調査したが共通点はない。日本の民族学博物館にある中国、カムチャッカ半島、アラスカ州のスキーも同様であった。

古代スキーの伝播・変容について、私なりの結論は得ている。前述の、西の森に暮す人たちは、スキーの作り方にも3つの方法があり、また型も少しづつ違っていったように、スキーは、その地方にある材料で、狩りの方法・地形・積雪量・雪質・樹木の植生等に合ったものを、それぞれ工夫して作っていた、といえる。

紙面の関係で「トナカイ遊牧の歴史と現在」「春・夏・秋・冬営地の暮し」「トゥバの人たちの衣・食」「シャーマニズムと狩猟」を記述することが出来なかった。また、ロシアのトゥバ調査はまだ終わっていないので、別の機会に報告したい。このフィールド調査には、多くの方々に助けられ、協力していただいた。キジル市にあるトゥバ民族・歴史・言語・文学研究所、モンゴル・オリンピック委員会、モンゴル・スキー連盟、通訳のエンフバット、バトトルガ、高島なおき氏、画家のツェグミド、トヤ、トゥムルバートル、の方々に感謝を致します。

参考図書

- B. A. トゥゴルクフ著「トナカイに乗った狩人たち」刀水書房 1981,
葛野浩昭著「トナカイの社会誌」河合出版 1990,
村上正二訳「モンゴル秘史」1, 東洋文庫 1987,
E. エバンス=プリチャード著「世界の民族」平凡社 1979,
メンヒェン・ヘルフェン著、田中克彦訳「トゥバ紀行」岩波書店 1996,

図1 モンゴル・トゥバ族の毛皮スキー（モンゴル・スキー連盟所蔵）

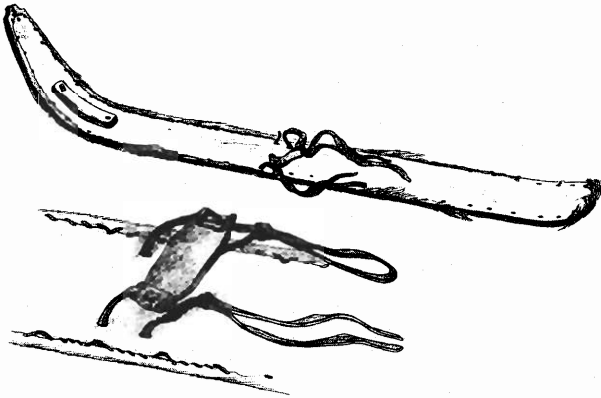


図2 スキーの作り方の例（モンゴル・トゥバ）

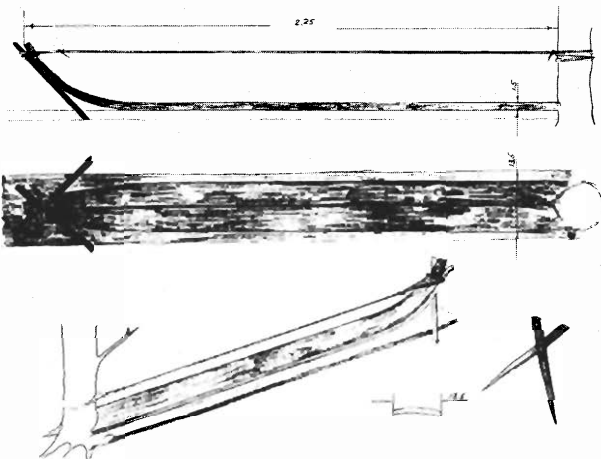


図3 締め具の例 (モンゴル・トゥバ)

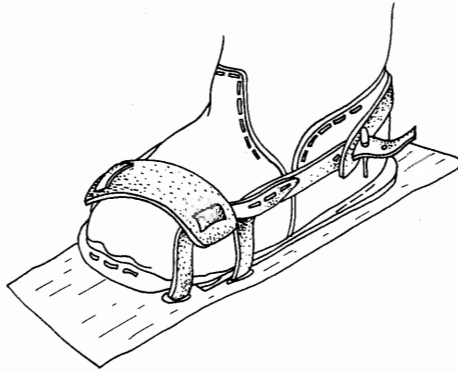
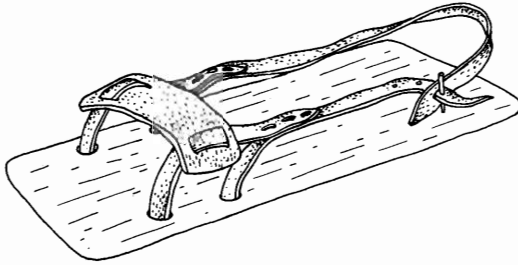


図4 モンゴル・トゥバ族のスキー「例1」
(現在、日本スキー博物館に展示中)

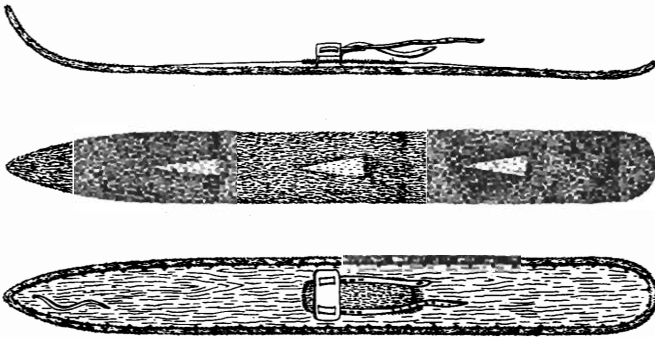


図5 モンゴル・トゥバ族のスキー「例2」
（現在、日本スキー博物館に展示中）

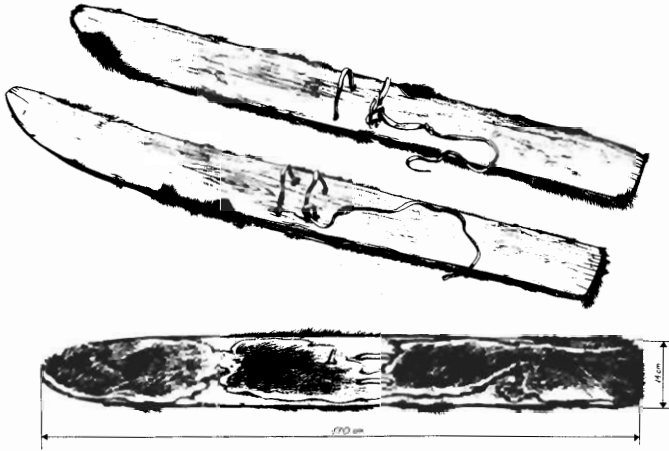


写真1 ロシア・トゥバ族の
テントとスキー



写真2 モンゴル・トゥバ族の
住宅ウルツ



写真3 モンゴル・トゥバ族のスキー滑走，テレマーク技術



写真4 ロシア・トゥバ族のスキーと白装束
(現在，日本スキー博物館に展示中)

